

梟の大旅行

林芙美子

青空文庫

むかしあるところに、梟が住んでいました。ふかいふかい森のなかで、晝も、ほの暗いところなのです。あんまり暗い森のなかなので陽氣なお天氣の好きな、小鳥や、りすも、みんな、森のそとがわに出て住んでいました。

梟はたった一人ぼっちで淋しいので、晝間も歌をうたって暮していました。

ぼろ着て奉公！

ぼろ着て奉公！

梟が、ぱたぱたと羽ばたきをして、こんなうたを歌うので、森のなかの榆の木は、ほんとに淋しくなつて退屈で仕方ありません。

んでした。

ああ、また梟が何か云っている。どうして、あいつはあんなに
いんきでじめじめした奴なんだろう。少しは、陽気な歌でもうた
つてくれるといいんだのになアと、ぶつくさ云うのです。本當に
森のなかはじめついていて、地びたの苔は、水氣でぐっしより濡
れていました。

梟は、この森で生れたのではないのですけれど、もうこの森へ
来て三年ばかりになります。誰も友達がなく、淋しそうに一人で
暮しています。

「おい梟君、君はいつたい、何が愉しみに生きているんだね？」
と、楡の木がききました。

梟はきよとんとした表情で、

「わたしかね？」

と首をかしげて、猫の眼のような、金色に光った眼を暗がりの方へむけました。ぷきつぷきつと固いくちばしを鳴しながら、

「そうだね。別に愉しみと云うものもないが、まあ、こうして、平和でいられる事が一番ありがたいんだよ。——私はね、昔は妙な暮しをしていたのさ。いろんな世界も見て來たし、とても怖ろしい思いもして來たものさ。君は何も知らないから、自由に飛べる私を妙な奴だと思うだろうけれど、本當は、私はこれが一番しあわせなんだよ。」と云うのです。

「ほう、君は、そんな面白いところを見て來たのかね。私は足が

動かないので、遠い世界をみた事はないが、梟君、おねがいだから、君の見たいろんな世界の話をしてくれないかね。」と頼みました。

梟は身の上ばなしを始めました。

私をはじめたものところがついたところは、人間の住んでいる世界で、私は金色のまるい籠の中にいたのです。べつとりとしたすりえと、時々貰う肉や鶏のもつでそだてられたンですがね、いつも、籠のまわりを、とても大きいまるいものや、私に似たような生物がじいっとのぞいて私を見ているのですよ。私は不安で仕方がないので、いつも、とまり木の真中にじいっとして暮してい

たんです。大きいまるい生物は人間の顔なのだそうで、この顔が私に餌をくれるのです。私に似た生物は猫と云う動物なんでね。おそろしくすばしい奴で、人間がいなくなると、いつも、籠のそばへきてううと唸っているんです。私はこの籠の中に二年もいました。一週間目には、私はジョロで水浴をさせられる習慣なのですが、寒い日にはやりきれないと思いましたよ。しばらくして、私に餌をくれるお嬢さんが亡くなってしまいました。お嬢さんが亡くなってからは、餌も忘れられがちで、私は、死ぬのではないかと思うほどやせほそって、生きていく氣力のない日がつづきました。夏になってから、私はとうとう思い切って、餌箱を入れた戸口から夜の戸外へ出てゆきました。始めは不安で、猫に出くわ

さないかと心配しました。板のつるつるした床を歩いているうちに、ふっと羽根を擴げてみました。何となく軀が宙に浮くのです。自分で自分の飛行術に自信がなかったのですが、急に私は夢中で飛びました。ぱたぱたとね。椅子の背中にとまってみたり、フェニックスと云う南國の植物だと云う植木鉢に這いあがってみたり、歩いたり、飛んだりすると云う事は、狭い、小さい籠の中にいるよりはずっとましなのです。そして、とても冒険的で愉しくて仕方ありません。

人間はいつも、もうもうと煙を吸っているのです、私は灰皿のなかをつついてみました。人間の吸う煙のかたまりはとても辛くてたべられないものです。私は開いている　　轉窓から、そつと戸外

へ出てみました。私は何とも云えないいい氣持でした。月と云うものを始めて見たのですが……茄子色の空に、まんまるく大きい光ったものを見て、私は何だろうと思つたものですよ。屋根々々は夜露で光っていますしね、庭の木もきらきら露に光っていて、とても美しい夜でした。

風と云う不思議な音を庭の木の上でききました。庭の木が、梢を鳴らしてさやさやとうごいていたし、蟲もないていたし、世の中は何と云う廣さなのだろうと思ひました。

木から降りて、私はまたそこいらを飛んでみました。とてもいい氣持ちに飛ぶ事が出来ます。

だんだん夜が明けて來ましたので、私は或家の軒下にとまって、

じつと四圍の氣配をみていました。私の住んでいた家はもう判りません。夜が明けかかると、近くのところ、鶏の鳴く聲がしました。小鳥が眼をさまして來ました。私はおなが空いて仕方がないので、軒下のくもの巢をつついたり、ごみをつついてみたりしました。

夜が明けて來ますと、私はもうまばゆくて珍らしい世界をみる事が出來ません。陽がぼかぼかとしてりつけて、軒下が妙に暑苦しくなり、私は眠くなりました。

その夜、私は、また、軒さきを出て、勇氣を出して飛びました。柔い土の上には、おいしい蟲の御馳走があります。私はお腹がいっぱいになるとまた飛びました。

三晩目には、私は、もうだいぶ遠くまで、もとの住家から離れてしまったようですが、とうとうまた人間につかまって、トラツクと云うものに乗せられて、一日じゆう私は生きた心地もなく動くものに乗せられていました。

廣い廣い海と云うものも呆んやりとした眼にうつりました。私はまた人間につかまって前よりも小さい竹の籠に入れられました。小さい籠は、私が羽根を擴げるといっぱいになるほど狭いのです。私はいきおいよく、二三度羽ばたきました。すると、籠の上のおもしがはずれて、籠がひっくり返りました。私はまたそとへ出ることが出来ました。

その家は自動車のガレージだったので、私はそのままぱたぱた

と、コンクリートの固い道を這うように飛びました。水道の水がしたたっているのです、ごくごく飲みました。とてもおいしい水でした。すると、何だか黒い大きい動物が、とても大きい聲で吠えだして私に向って來ます。私はびっくりしてトラックの上へ飛びあがりました。その動物は犬だったのです。

犬はとてもよく吠えました。私はそつと屋根裏づたいに戸外へ出て、月に光った白い道の方へ飛んでゆきました。白い道だと思つたのは廣い河でした。河岸にはいっぱい食物がありました。森閑として、人間は家の中によく眠っているので、四圍はまるで私だけの天地です。

私は、もう、もとの住家に戻ってゆきたい氣は少しもありません。

んでした。でも、時々、やさしかったお嬢さんの事を思い出しました。

河にはどうして、こんなにどつきり水があるのかしらと不思議に思いました。ぴちやぴちやと水が鳴っています。私も、ほっほっと鳴いてみました。すると、思いがけない事に河岸の藪の中に何だかごそごそと動く音がしました。私はむじなだと思ったものですから、またばあと飛び立って、船の屋根にとまりました。

足もとがゆらゆらゆれるので、また飛び立って地びたに降りました。すると、今度は、私の家にいた猫と似ている生物がさつと私に向って来ました。まつしろい猫です。私はびっくりしてさつと飛び立ち、小さい樹の上へ逃げてゆきました。

世の中に出たのはいいけれど、私は籠の中のように、平和に眠る事が出来ません。私は苦しい旅ばかりそれからつづけました。けれど、私の羽根はますます丈夫になり、私は、だんだん心も元氣になりました。この森へやつとたどりついた時には、私は、もう相当年をとりました。私は三年も旅をつづけて、やつと、この安樂な森へたどりついたのです。

私はこの森が一番好きになりました。

たべるものも、よくを出さないかぎり、平和に食べられますし、自由に歌をうたえますし、何と云う住み心地のいいところだろうと思つています。私はまだ、あと一二年は長生き出来るでしょう。森の神様に心から私は感謝しているのでございます。

梟はそう云って、ぶきつぶきつとくちばしを鳴らしました。

青空文庫情報

底本：「童話集 狐物語」 国立書院

1947（昭和22）年10月25日発行

入力：林 幸雄

校正：鈴木厚司

2005年5月7日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

梟の大旅行

林芙美子

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>